会いたくて

学問 文化

俳優　田口 トモロヲさん

アングラ演劇の香り今に　自由な表現を追求し続け

俳優・田口トモロヲさんがミュージカル「獅子 THE LION-BEAT」に出演します。既成の演劇に反発して1960～70年代に盛んだった「アングラ演劇」を牽引した寺山修司の戯曲です。ミュージカル初出演の思いや多才な表現の原動力を聞きました。（鎌田有希）

若い頃は数々の小劇場に出演して〝歩くアングラ〟と呼ばれました。

「寺山作品に出演することは一つの夢でした。寺山さん率いる劇団『天井桟敷』の芝居は、サーカスのテントや見せ物小屋を訪れたかのような猥雑さやカオスな世界観が魅力で、あらゆる既成の概念に反発して新しいものを生み出そうとするエネルギーにあふれ、若者に人気でした」

主人公は熱烈なボクシングファンの貞夫。ある日、謎の男から、ボクサーにしてやる代わりに言葉を差し出せともちかけられます。契約を交わしてリングへ上がり、対戦するたびにKO勝ちを奪い、沈黙のボクサーとして注目されますが、書き置き一つで遠ざけた恋人が気がかりで…。無謀な夢を追う主人公の葛藤は、ネットやSNSの情報にとらわれて悩む若者の姿ともとれます。

役の人生深め

田口さんは、主人公が通うジムの会長・木頃を演じます。木頃のモデルは漫画『あしたのジョー』に登場するトレーナー・丹下段平と聞き、「どんなボクサーだったのか、どんな人生なのか」と役について深めていると言います。「木頃のキャラクターにはボクシングと競馬が好きだった寺山さんの創作意欲の跡が見えて興味深い。僕はソロを2カ所任されたんだけど、せりふに歌を交えるのは初めてで、初日に向けて戦々恐々としています」

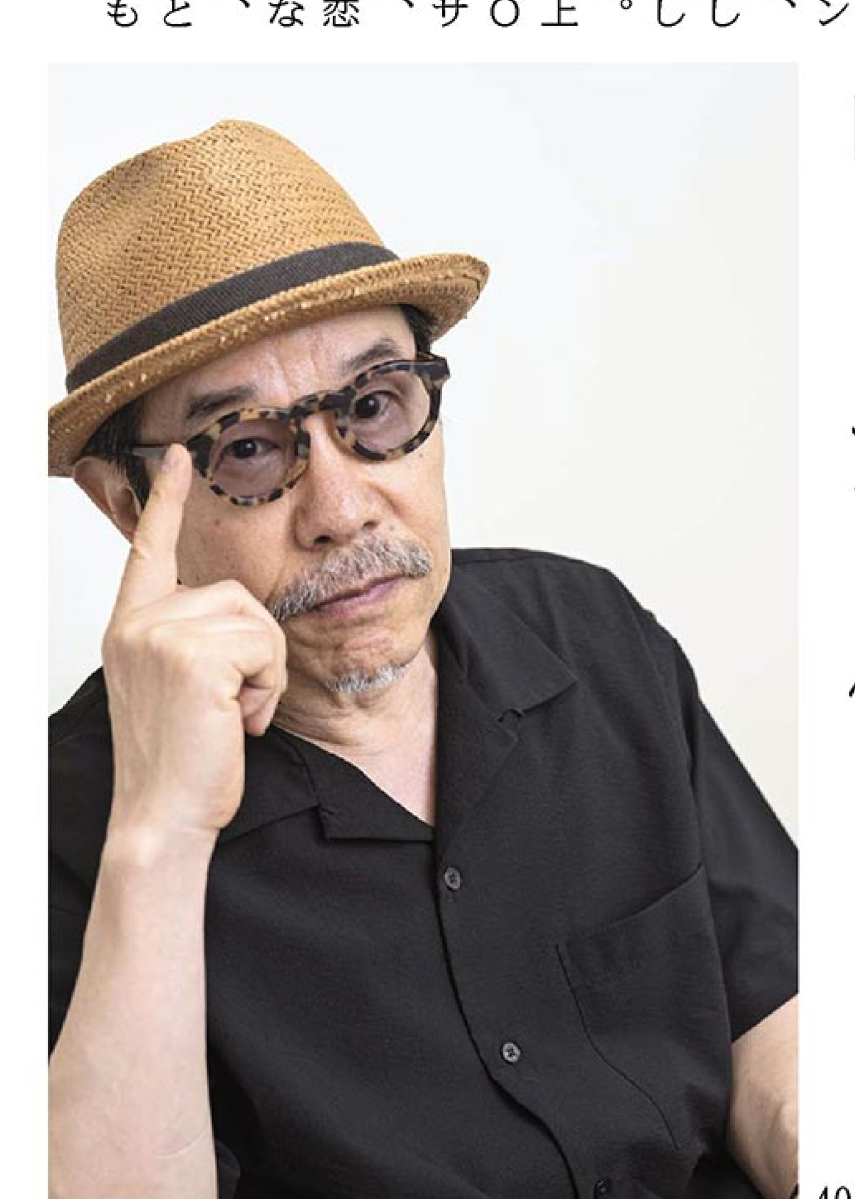
ナレーターでも知られます。レギュラー番組「プロジェクトX」（NHK）は、感動的なエピソードをつぶさに伝えるナレーションに涙を誘われたとの声も多く、「視聴者の方と同じように僕も泣かされてます」と苦笑します。

「自由な精神で自由な表現を追求したい」と、アングラ演劇とパンクバンドに熱中した20代。32歳の時、塚本晋也監督のカルト的な人気映画「鉄男」（89年）で主演し注目を集めます。名監督の現場を渡り歩き、40歳で今村昌平監督の「うなぎ」（97年）に出演。今村監督との出会いは忘れられません。「監督の『豚と軍艦』『にっぽん昆虫記』など底辺から日本を丸ごと深くえぐった力強さに圧倒されます。現場でも粘着質で、リハーサルが多くて驚いた。巨匠の威圧感に緊張しました。今村組でご一緒した監督の盟友・小沢昭一さんが、監督を努力する天才と語るほどでした。こうも日本人の土着性や生き方にこだわった監督はもういないんじゃないのかな」

自分の映画を

自身も映画監督です。今年公開の「ストリート・キングダム　自分の音を鳴らせ。」は70年代後半のパンクロックムーブメントを描く劇映画。漫画やインディペンデント映画といったサブカルチャーを選び取ってきた自分がいかにマイノリティーだったかを確認し、そんな自分を好きになれました。「自分にしか撮れない映画を」と4作目のメガホンを握ったと言います。

「世間であまり語られない、日が当たらないマイノリティーな領域を広く知ってほしいし、もっと追求してみたいですね。今回の『獅子』でも、寺山さんは異端を描きました。どんどん整頓されて美しくなっていく世の中で、寺山作品の持つ世界観や熱量が響くはずです。世代の異なる杉原邦生さんの演出による、今を描くアングラ作品で新たな自分を発見したい。パイオニア精神は大切ですね」


後藤淳撮影

たぐち・ともろを　1957年生まれ。97年「うなぎ」で毎日映画コンクール男優助演賞、2009年監督作「色即ぜねれいしょん」で新藤兼人賞銀賞を受賞

＊Bunkamura Production 2026 ミュージカル「獅子 THE LION-BEAT」寺山修司作、杉原邦生演出。10月4～20日、東京・THEATER MILANO-Za。11月7～8日、大阪・Skyシアター MBS

戦争はいやだ！（下）　戦後日本の命脈をたどる

山田敬男

軍国主義復活　許さない

2026年2月の総選挙で、自民党は単独で3分の2を超える316議席を獲得した。与党の日本維新の会と合わせると352議席になる。自民党の圧勝である。自民党に投票した有権者のなかに、「何かを変えてくれるかもしれない」「初めての女性首相だから」などの漠然とした高市首相への期待があった。この背景に、1990年代以降の新自由主義的経済の破綻による格差と貧困の拡大などの生活不安があり、激しい競争によって人生の夢が奪われ、生きがい、働きがいの喪失という深刻な社会不安があった。それが高市首相の「積極財政」や「消費税減税」の提起によって、漠然とした期待に変えられたのである。

この結果、衆参両院で、改憲勢力が3分の2を上回り、改憲発議の危険が一段と高まっている。

防衛力増強へ

市民たちの新しい運動が起き始めている。2月の「19日行動」を契機に、ペンライトを手に多くの市民、とくに女性たちが立ち上がりつつある。SNSを活用して「デモカレンダー」による自主的な運動が全国に広がっている。

しかし国民の平和意識、憲法意識は複雑である。2026年の世論調査をみると、改憲容認が多数になっている。9条改憲は、9条2項に手をつけず、自衛隊の存在を明記する自民党案にかなりの賛成がみられる。

25年のNHK放送文化研究所「世論調査から読み解く戦後80年」によると、国民のなかで、防衛力増強を支持する傾向が急増している。「今より増強すべき」が、1990年代後半は10%未満であったが、2014年23%、17年31%、25年に45%に増大している。中国「脅威」の浸透と14年以降の防衛政策の転換の影響がある。

東京・渋谷でのさまざまな市民運動

歴史への責任

しかし、国民は決して好戦的になっているのではない。今の日本を守る上で最も重視すべきものは何かという質問に、「アメリカとの同盟関係を維持する31%、アジアなど、アメリカ以外の国々と協力する22%、国連の枠組みの中で体制をつくる23%」という回答がなされている。日米同盟の継続がトップであるが、全体の3分の1程度にすぎない。アジアとの協力や国連の枠組みのなかで日本の安全を考えようとする国民が4割を超えている。

また「今後、日本が大切にすべき社会」という質問に、「戦争のない平和な社会」が75・4%と突出している。戦後日本の原点である「戦争はいやだ！」という思いが生き続けている。

さらに、第2次世界大戦への関心が多くの国民にあることが指摘されている。重要なことは、この戦争への関心を科学的な戦争認識に高めることにある。戦前・戦中の軍国主義のシステムは、国民＝民衆を戦争に動員し、悲劇的な体験とともに加害的役割を余儀なくさせた。この加害と被害という「二重の悲劇」をもたらす軍国主義のシステムの恐ろしさと問題性を深く理解し、この復活を許さないことが今日の国民的課題であり、私たちの歴史に対する責任といえる。

（やまだ・たかお　現代史家・労働者教育協会名誉会長）（おわり）

◇（上）は7月20日、（中）は8月17日掲載。

朝の風

国家安全保障とは一般的に、内外のさまざまな脅威から「国家の独立や領土」「国民の生命・財産」を守り、安全な状態を維持することをいう。

その手段は多様で、他国からの武力攻撃に対し防衛力や同盟により国を守る方法もある。エネルギー、食料、鉱物資源などの供給網を確保し、経済的手段による他国からの威圧や技術流出を防ぐ経済安全保障や、未然に紛争を解消する外交や経済協力もある。

国連は、「個々の人間の生命や権利」に主眼を置き、感染症や気候変動、貧困などの恐怖から人々を守る概念として「人間の安全保障」を提唱している。

守るべきは国か、人か

確かに、国家の枠組みでは、「国のために戦う」「国を守るために自己を犠牲にする」となり、個人の命よりも国家の存立が優先され、武力による戦争を起こすことになる。

「武器によらない安全保障」を目指す市民団体「平和構想提言会議」のシンポジウムでは、人々の生活、地域文化、人身の安全を中心におく「民衆の安全保障」への転換が言及された。武力衝突が起きた後に対処する「川下」の対応ではなく、事前に信頼醸成や予防外交により紛争の根本原因を取り除く「川上」の包括的平和構築だ。これは日本国憲法の目指す姿でもある。（松）

演劇　「喜劇　ワタクシたちの道徳」（青年劇場）

強権的な法制化を批判

古元道広撮影

現代の日本人には道徳を語る資格などなく、国家としての日本にも道徳はないのか。我々の道徳観の危機的な現実を、第2次安倍政権以降で浮上した森友加計問題、統一教会の政治への浸透と名称変更問題、政治とカネの問題を交えた政治風刺劇として描いた（作＝福山啓子、演出＝田中麻衣子）。

4期目の衆議院選挙で当選した徳丸秀一（島本真治）は、念願だった文部科学大臣に就任する。選挙の応援者が、上記の問題をモデルにした関係者たち。徳丸は選挙の見返りに、彼らの要望に沿うように動く。

物語のもう一つの軸は、総理の悲願の意を受けて徳丸が進める、道徳の教科化だ。前川喜平がモデルの文部科学事務次官・相川太平（奥原義之）は、教育とは個人が幸せをつかむためのものであり、国家に合わせて役に立つ人間をつくるものではないと、制度化を遅らせようとする。強権的に法律を作ることへの、昨今の政治への批判が込められている。

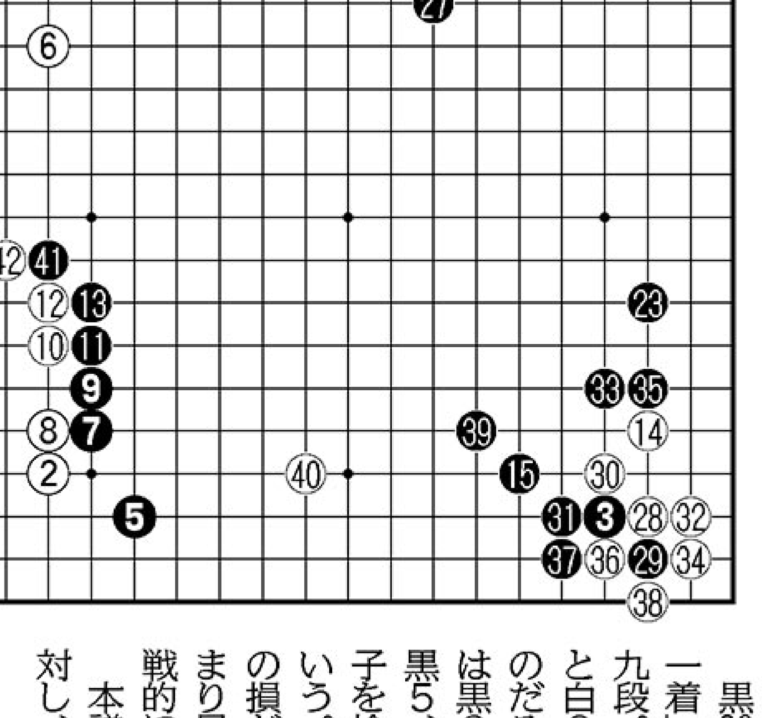
新設した給付型奨学金が優秀な学生を国家に抱え込むための制度だったり、地方議員時代から応援する後援会長からの陳情を取り合わなかったりと、徳丸は初心を忘れた政治家となってしまう。結局、桃山学園（加計学園）問題が浮上して解散総選挙となるが、徳丸は公認を得られずトカゲの尻尾切りにされる。それでも彼は、国旗が乗る椅子の傍らで、むなしく右派的な演説をする。日本の先行きを思わせるうす暗い光景が、明るい笑いと対比的で印象的だった。（**藤原央登・劇評家**）

21日まで、東京・紀伊國屋サザンシアターTAKASHIMAYA

囲碁第51期 新人王戦

（3回戦 第3局 第1譜 1～42）

黒 三段 曽富康（マレーシア出身 23歳）
白 四段 三戸秀平（岡山出身 20歳）
（各3時間持ち、黒6目半コミ出し）



三戸秀平四段

初手合

本局は8月10日、曽が日本棋院関西総本部に遠征して打たれた。

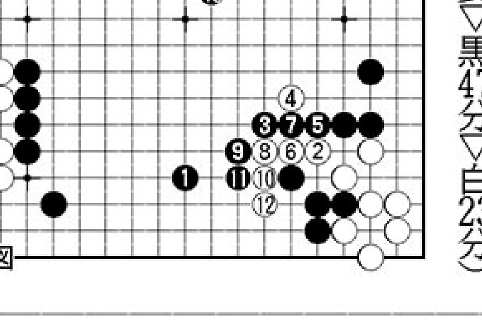
両者は初手合だった。定刻の午前10時を迎え、握って曽の黒番に。一礼をかわして対局が始まった。

黒5のカカリに、三戸は白6と左上のシマリを優先。黒7からの定石で黒13に手を抜き、白16の三々入りで地を稼ぐ。黒23のハサミに構わず白24、26とわが道を進む。黒27は白Aの押しを警戒している。以下白が28から38で右下を生き、黒は外勢を築いた。

黒39は「曽三段の工夫の一着」と解説者の後藤俊午九段。代えて参考図黒1だと白2のハザマを気にしたのだろうと続ける。これには黒3、白4と進んだ時、黒5、7から気前よく黒四子を捨て、黒13が有力だという。雄大な構想だが、地の損が大きく、右辺のまとまり具合も不透明なので実戦的には選びにくい。

本譜、白40の打ち込みに対し、黒がどう攻めるか。（吉奈一平）

（消費▽黒47分▽白23分）


参考図

棋界メモ

■上野六段の棋聖戦挑決T進出ならず―囲碁

囲碁の芝野虎丸棋聖＝十段と合わせて二冠＝への挑戦権を争う第51期棋聖戦のCリーグで、上野愛咲美六段と富士田明彦八段による優勝決定戦が14日に日本棋院東京本院でおこなわれ、332手まででで富士田八段が黒番1目半勝ちをおさめCリーグ優勝、挑戦者決定トーナメント入りを決めました。

上野六段の女性棋士初の挑決T進出はなりませんでした。

上野六段はすでに女性棋士初のBリーグ昇格を決めています。

［2026・9・21・月］

将棋第57期 新人王戦

（準々決勝第1局 第5譜）

先▲五段 高田明浩（岐阜出身 24歳）
△三段 北村啓太郎（東京出身 22歳）

（指始図は△4四銀まで）

△北村 なし　▲高田 歩四

▲2四歩1 △同歩 ▲5四歩1 △同金 ▲2四飛 △5五歩 ▲4七銀 △3六歩 ▲同銀左 △2三歩 ▲2六飛1 △7五歩 ▲3四歩2 △7六歩 ▲3三歩成1 △同金 ▲7六金 △7四銀 ▲3四歩 △3二金 ▲4七銀 △7五歩 ▲7七金引 △3五銀 ▲2五飛 △4六銀 ▲同銀直 △同歩 ▲同銀 △6六銀 ▲8六桂 △7七銀成 ▲同角 △6六歩 ▲同角 △7六金

（指し手・126手）

持ち時間各3時間　消費時間▲3時間0分　△3時間0分

振り出しに

既報の通り2人は奨励会入会が同期で、小学生時代からのライバルだ。奨励会では高田が常に一歩前を走り、高田が四段に昇段（2021年4月）した半年後に北村は三段に昇段。現状は少し水をあけられたが、追い付き追い越せ、の思いは胸に秘めているだろう。

ただ北村が遅れを取ったのには奨励会特有の「香落ち」と関係がありそうだ。

「香落ちの上手が苦手で、級位者時代も勝率は良くなかったのですが、上手のみになった二段時代は全く勝てず、最後には香落ちは捨てて、平手を全部勝つしかないと割り切った」と北村。

指始図で▲3四歩が目に付くが、△2五桂▲同飛△5五歩▲4七銀△8六歩▲同歩△8七歩で後手良し。2歩を持って△8六歩～△8七歩が狙い筋だ。北村は先手が困っているのでは、と思ったそうだ。

だが▲2四歩～▲2四飛が「見えてなかった」と北村。一見するとピンとこない手順だが、▲2六飛まで進んでみると次の▲3四歩が受からない。先述と違い歩切れなので△8六歩～△8七歩の筋がない。「その手があってみると△4四銀（指始図）が甘く、△3六歩▲同銀△4四銀でした。本譜は自信が揺らぎました」と北村。

形勢は振り出しに。高田も1分将棋に入り、主戦場は玉頭の攻防へ。△7六金（指了図）に高田は意表の強手で応じる。（田中幸道）

（指了図は△7六金まで）

△北村 歩　▲高田 銀銀歩八